



2004年2月20日

No.77号



# JAWAN

## 日本湿地ネットワーク・JAWAN通信

日本湿地ネットワーク (Japan Wetlands Action Network)  
〒191-0052 東京都日野市東豊田3-18-1-105 柏木実 方 TEL&FAX 042-583-6365  
郵便振替口座 00170-8-190060 日本湿地ネットワーク  
団体会費 5000円 個人会費 3000円 JAWAN URL : <http://www.jawan.jp/>



吉野川河口で始まった東環状大橋の建設工事(左)と、吉野川河口干潟で見つけた生きものたちの痕跡(右)(写真:井口利枝子/鈴木マギー)

【目次】	2004年はじめの憤り(辻 淳夫) .....	2
	三番瀬 今後の見通し(牛野くみ子) .....	3
	新聞報道に思う「語られぬ三番瀬再生」の話(竹川未喜男) .....	4
	大分県佐伯市大入島石間浦の埋立事業の問題点(山下博由) .....	6
	諫早湾の中・長期閉門調査の早期実施を!(矢嶋 悟) .....	7
	和白干潟が国指定鳥獣保護区になりました(松本 悟) .....	8
	空・川・海・ひとが出会う吉野川ひがた(井口利枝子) .....	9
	中津干潟の生物調査報告書を発行しました(足利由紀子) .....	10
	救え!東アジアの湿地と干潟 東京ウェットランド・ウィークを開催(青木智弘)...	11
	マイナビルギナからの便り 2003年繁殖調査報告から(柏木 実) .....	12
	中池見湿地から朗報!大阪ガスが中池見湿地を敦賀市に寄付 .....	15
	JAWAN会計より 2004年度(1月~12月)会費納入のお願い .....	15
	JAWAN 干潟を守る日2004 イベント一覧/編集後記 .....	16

# 2004年はじめの憤り

辻 淳夫（日本湿地ネットワーク代表）

世の中に理不尽なことは多いけど、国の指導者がめちゃくちゃな論理を使うようになってはおしまいだ。「国際紛争の解決に武力を用いることを放棄した」崇高な理想をかかげた憲法さえ理由にして、国連の意思に反してイラク侵攻を進めたアメリカの同盟軍として、自衛隊を派遣するというのだから。

世界の指導者を自認するアメリカ大統領は、国連調査団を押し付け、「大量破壊兵器」を理由にイラク侵攻を進めたのに、自国CIAの調査団長がその「存在」を否定すると、「やったことは正しかった」が、「私も事実を知りたい」とトボケている。

意図的であったかどうかはともかく、結果として明らかになった「判断の誤り」からの侵攻が何を引き起こしたのか、イラクの民間人1万人以上と自国の兵士500人を犠牲に、どんなに抑えつけても、「自爆テロ」によるレジスタンス（抵抗）が広がる現実がある。

「力は正義」と、抵抗するものは圧倒的な火力で粉砕する身勝手な暴力と、民族の誇りを無視して、「自分の都合」を押し付ける傲慢さこそが、9.11を引き起こした本質であることを、その被害者の遺族ですら気がついているのに。

問題は大方のマスコミも、「どうしてこうなったか？」の調査団設置に大統領が同意したと、まるで同じ側に立つ報道をしていることだ。「判断の誤り」と「侵攻の過ち」を反省し、元の状態に戻していく努力を求めることが先だろう。

湿地保全とは場違いなようだが、「いのちの尊厳」を忘れ、「判断の誤り」を認めず、「調査」が必要と、問題をすり替え、先送りしていくのは、「諫早」における農水省と同じで、それを許してきた私たちの社会も、同質な問題を抱えている。

「有明大異変」から3年、復元すすまぬ諫早干



中・長期開門調査検討会議の会場前でアピールする、諫早干潟緊急救済東京事務所などのメンバー（2003年12月19日）

潟をもう一度思い起こしてみよう。

そもそも、諫早干拓事業は、アセスメント（環境影響評価）で「諫早を閉め切っても、その影響は近傍に限られ、有明海に及ぶことはない」という判断をもとにはじめられた。

そのとき、誰もがその判断に同意し、その結果を予想しなかったのだろうか？

故山下弘文さんはこの事業に一貫して反対してきた。諫早湾全域を閉め切る当初構想の3分の1になったとはいえ、漁師が「有明海の子宮」、「いのち湧く泉水海」と呼んでいた諫早湾内の干潟全てを、一気に失うことの結果を正確に見ぬいていたのだ。

誰の目にも明らかに「有明海への影響」が出た以上、上記のアセス審議会を再招集して、アセス判断の当否を確認させるべきだった。そうした判断をした委員個人としても、良心があるなら、山下さんや漁師たちの言った通りになったと、土下座してでも謝罪し、水門を開き、締め切り堤防を撤去する「原状回復」を進言すべきであった。

しかし農水省は、「海苔不作原因を科学的に調査するため」と（第三者）委員会を作り、そこで出た短・中・長期の開門調査提言さえ、短期を実行しただけで中断、次は農水省OBの「論点整理」委員会で「やらない提言」・・・。「調査」とか「委員会」とかいうものに期待しがちな国民を、先送りすり替えの術でめくらましたのだ。

佐賀地裁の差し止め判決や、公害審議会の「裁定」に期待しながらも、私たちは、この3年間の「茶番劇」に、もっと怒らねばなるまい。

# 三番瀬 今後の見通し

牛野くみ子（千葉の干潟を守る会）

三番瀬について、これまで2年間の議論を続けてきた円卓会議は、1月22日、最終案を堂本知事に提出し、解散しました。

知事は「限りない知恵が詰まった報告書。こんな大仕事になるとは夢にも思わなかった。住民参加で計画が練り上げられ、県に宝物をちょうだいした。この千葉モデルをジャパンモデルにしたい。計画を実行に移す努力を迅速にさせていただく」と答えました。

計画案には、海域をこれ以上狭めないことを原則に、かつての三番瀬の環境を復活することが目標として掲げられています。「海と陸との連続性の回復」「生物種や環境の多様性の回復」「漁場の生産力の回復」等々です。そして、この計画案を支えるための条例要綱案、千葉県三番瀬等の再生、保全および利用に関する条例が添付されています。ここには禁止行為や罰則、また円卓会議の後継組織が定められています。

今後、知事はこの計画案を精査し、実行に移すものと考えられます。

すぐ実行されるであろうと思われるものに、垂直護岸の前面に石積み護岸を設置する、市川市塩浜2丁目の改修護岸前面の干出域があります。このことに関して知事は、昨年10月、国の補助を受け改修することを明らかにしているからです。しかし、技術的なつめはされていません。検討・検証する後継組織の早期設置が望まれます。

この後継組織を定めた条例案は、報道によれば4月以降県議会で審議されるとのことですが、県議会ですんなり通るのか不安が残ります。通りそうもないとなると、知事は提出さえしないだろうというのが大方の見方です。

三番瀬は現在でも漁がされ、潮干狩り、ハゼつりと賢明な利用がされています。私たちは、2005年のウガンダでのラムサール条約締結国会議で登録されることを願っています。

しかし、漁協は国指定鳥獣保護区特別保護地区になると、建築物、工作物の新築・増改築が規制される、覆砂・養浜なども規制されるのではないかと、水鳥による稚魚の食害や、ノリへの羽毛混入の被害が拡大するとの懸念を持って反対しています。よって、ラムサール条約登録にも反対しています。

また、円卓会議では一度も議論されなかった第2湾岸道路。堂本知事は積極的に推進しています。第2湾岸道路とラムサールそして条例案。さー三題噺のはじまりです。

どうも見通し明るくないことばかり書いてしまいましたが、それにはわけがあります。

堂本知事は1月29日の定例記者会見で「私は無党派主義ではない。選挙は勝たねば」との考えを明らかにしたそうです。このことは来春、出馬の際は、政党の推薦や政策協定の可能性を示しています。自民党はまだまだ開発ドンドンです。ジャピック（日本プロジェクト産業協議会）では東京湾にゴミの島、ランドフィル島を計画しており、もう、埋め立てはなくなったとは言いきれない状況があるのです。

運動はまだまだ続きそうです。



岡島円卓会議会長から再生計画案を受け取る堂本千葉県知事（右）

# 新聞報道に思う 「語られぬ三番瀬再生」の話

竹川未喜男（三番瀬市民調査の会）

全国の自然保護団体の注目を集め、昨年ラムサール締約国会議でもその保全と登録をアピールした東京湾奥部の浅海・干潟、三番瀬の再生計画は、2年にわたる論議を経て、1月22日、最後の円卓会議において、堂本千葉県知事に手渡されました。

三番瀬の埋め立て工事を中止させ、海域を狭めず、一部でも陸地で自然再生を図る計画が住民参加の公開の場で生まれた意義は大きかったと思います。

ほとんどの新聞は、「再生へ護岸一部撤去」、「湿地、干潟増を提言」などの見出しを掲げ、情報公開・住民参加による「自然再生のモデル」として「成功すれば今後の湿地回復や護岸工事の先駆的事例になるだろう」などといった好意的な報道をしました。しかし深く現場の論議に関わった市民として、「語られぬ三番瀬再生」の話をレポートしたいと思いました。

堂本千葉県知事は「期待を上回る、精緻な内容の計画です。どれだけ感謝してよいか分からない。危険な護岸など緊急に対応すべき問題もあるが、県としては宝物を投げられたという意識で、できる限り忠実に取り組みたい。」と参加者に感謝と決意を表明されました。



三番瀬円卓会議の最終会合（2004年1月22日）

私は堂本知事の言われた「徹底した住民参加」は、今回の円卓会議では実現できていないと考えております。県事務局のご努力は多としますが、円卓会議の運営は、予算取りからスケジュールが逆算され、さまざまな利権追求に振り回されました。その結果、常に時間不足と調査不足に悩まされ、おまけに11もの下部組織が目白押しに開かれ、それぞれの「まとめ」から計画が組み上げられ、円卓会議は報告の連続で肝心の論議の時間がなくなる結果となりました。

私たちが一昨年暮れに実施した1500人訪問アンケート（市民調査）では、一般県民は三番瀬がもう守られたと安心したのか、72%の方が「海の自然や生き物の多様性の保全第一」と回答し、円卓会議での海浜造成や土砂投入をめぐる攻防など知らなかったと思います。素案へのパブリックコメントでは大多数が、貴重な静穏、泥質浅海・干潟の生態系と評価された猫実川河口域への土砂投入に懸念を表明しました。

他方、埋立地の工場専用地域の土地所有者は、用途区域変更（地価上昇）含みの海岸保全区域の変更要求が通って音なしとなり、漁協代表委員らは大規模埋め立てを前提とした漁港構想が会議で意見されるや半年余り会議をボイコットしたばかりか、年末には漁場に無用として、ラムサール反対の理由を付して組合員にアンケートを出しました。

千葉県自然保護連合や千葉の干潟を守る会などは、何度も要望や意見書を出し、問題の猫実川河口域への土砂投入、市民調査結果の発表、ラムサール2005年登録を迫りました。しかし「手続き民主主義」と、一度決めたら修正を嫌う「権威主義」の壁に阻まれました。私自身は知事の「徹底した住民参加」に共鳴して、県や円卓



会議主催の三番瀬に関わる会議、行事168回中、118回に参加し、20通の意見書を出し、会議の運営、事実究明、情報公開を求めてきました。しかし何らかの形でレスポンスがあったのは6回だけでした。それでも許される限り毎回会場発言を続けてきました。

最後の円卓会議で、最大の争点が、堂本知事入場の瞬間まで持ち越されていたことはマスコミ承知の事実です。「猫実川河口域への土砂投入と現状の総合解析」の問題です。環境団体が主張してきた、「猫実川河口域は明らかに“堆積傾向”にある。三番瀬の干潟は“全て人工干潟”は大きな事実誤認。訂正せよ。」とデータを突きつけ計画書の修正を求めたのです。その結果、当日知事に渡された計画は“成案”とはなりませんでした。多くのマスコミの方々の前で起きたハプニングでした。もう一つの争点ラムサル登録問題は、ついに漁業者への県と水産庁の別格配慮の結果見送られてしまいました。計画の維持推進のための後継組織づくりと県条例の議会承認、環境調査の継続、情報公開・住民参加など、新聞が指摘している通り課題山積です。

市民の環境問題への関心はマスコミの取り上げ方に影響されます。各紙の解説記事を見てみましょう。(要点要約)

「県や県議会には会議の提言を十分に踏まえ、真剣な議論を望む。何より県民自身が議論の方向を注視し、主体的に三番瀬問題に向き合うことだ。」(読売)。「海域は狭めず、新たな埋め立てに歯止めをかけた。「保全」重視ながら多様な改善策の試行の可能性を残した。再生事業実施の規模や範囲、主体や維持・管理の方法など真の具体化は今後の問題。第一歩を踏み出すまでにはまだ対立再燃の余地もある。知事の任期をにらんだ時間の制約から、対立点の解消より合意優先の場面もあった。各種現況調査の解析作業が遅れ、報告書は十分でなかった。会議の経過をよく県民に知らせる姿勢も不十分。幅広い層に議論が広がらなかった。」(東京)

「未知の要素が多い自然が相手だから、拙速を避け、丁寧な作業を求めた。自民党多数の県議会への対処について、環境が人類と時代の普遍



3万ページに及ぶ三番瀬再生計画の報告書類

的テーマになった現実直視の必要性あり。」(朝日)。「利害相反する激論の中で、多数決なしの「総意」で計画を作った。完全公開を貫き、放置すれば進む環境悪化に歯止め策も出された。「千葉方式」と胸を張れる大きな成果だ。三番瀬保全と相反する第二東京湾岸道路ルートをどう決めるかの難題あり。毎回、長時間の会議は下部組織を含めて163回、3億円というカネを費やした。早期実行である。」(千葉日報)

「行政が設置した検討組織で会議の公開、議事録のホームページ化は評価できる。だが県民の関心は今一つで傍聴者も固定化した。今後の県の実行力を問う。「再生」が目標だから、堤防や護岸の整備で終わりとはいかぬ。国や地元市との負担問題、事業の優先順位、後継組織での論議など、さらに屈折が予想される。県は一層の住民参加、会議公開、実りある議論を望む。」(毎日)。「埋め立てや開発主導型の県行政の転換点。今後の街づくりに影響を与えよう。」(日経)

新聞社の記事を並べましたのは、県の広報活動が不十分なため、例えば県民たよりに詳細に載ることは少なく、後追いの県ホームページに限られており、三番瀬を知らない県民はその情報を主にマスコミから得ていたからです。上述の市民調査ではアンケートに59%の方が新聞で知ったと回答しています。そのマスコミ報道もイベント中心で、残念ながら三番瀬の自然、漁業、護岸、用地問題など、論議の経過や、市民調査などは扱ってきませんでした。しかし、東京と毎日の解説はそうした経緯を踏まえて書いているように思われました。「三番瀬の再生」はスタートしたばかりです。市民と共に歩むマスコミに大いに期待しています。

# 大分県佐伯市大入島石間浦の埋立事業の問題点

山下博由（貝類保全研究会）

大入島（おおにゅうじま）は、豊後水道に面した佐伯湾に浮かぶ周囲23.2 kmの離島である。佐伯市の佐伯港からは約700 mの距離（フェリーで7分）である。人口は1300人弱。漁業を中心とした集落であり、大入島の漁業生産は、佐伯市全体の7割を占めている。

フェリーの着く島の表玄関であり中心地である石間浦（いしまうら）は、島の南端にある。石間浦の東海岸に、大分県土木建築部（国土交通省国庫補助事業）による大入島東地区港湾環境整備（廃棄物埋立護岸）事業（事業期間、平成9年～22年）があり、6.1 haの埋め立てが計画されている。公有水面埋立免許願書は平成14年7月に提出され、15年1月に認可された。

石間浦の埋立計画地は非常に豊かな磯・海辺環境である。海藻や貝類（アワビ、サザエ）などの地先漁業の豊かな漁場になっていることが、何よりもそのことを証明している。環境省の全国藻場調査によっても2 haの藻場が確認されている。バンドウイルカの回遊域であることも、磯環境の豊かさを示している。山下及び福田宏博士（岡山大学助教授）らは、2003年8月のわずか2日間の調査で、埋立計画地周辺から150種以上の貝類を確認した。その中にはミヤコドリ

ガイなど6種の重要な絶滅危惧種と20種以上の大分県新記録種が含まれており、この海域の生態系の豊かさ・貴重性が示されている。その他、ウミシダ・タツノオトシゴなど多くの海洋生物が生息している。

石間区（＝石間浦）では、古くから、地先の海藻や貝などを地区民が採取し、その権利を地区として所有・保護してきた。これが「磯草の権利」と呼ばれる慣習的漁業権であり、いわゆる入会権や地先権の一種である。地区住民全員が自由に採貝・採草する権利を有する他、入札によって権利を独占することもできる。入札によって得られた収入は区の運営費にあてられてきた。現在では、海藻の採捕は住民が主に自家消費として行ない、経済価値の高いアワビ・サザエの採捕について入札が行なわれている。入札額は30～60万円であると言われる。現在、埋立事業との関連において「磯草の権利」訴訟が大分地裁で行なわれている。熊本一規氏はその著書の中で「磯草の権利は地区の持つ財産権には間違いありませんから、それを無視して埋立はできません」と述べている。また、石間浦の埋め立てを、石間区以外の組合員の多数決で決めたことについて、漁業権放棄無効の訴訟も行なわれている。

埋立必要理由書には、埋立の動機として、（1）市民が水辺と親しむための緑地の整備、（2）住宅用地の確保、（3）港湾整備及び道路整備に伴う土砂処分場の確保、が挙げられている。しかし豊かな自然を破壊しての公園化は疑問であるし、緑地も宅地も大入島の既存の陸地に十分に存在している。埋め立ての実質的な最大理由と考えられる土砂処分においては、佐伯港内の浚渫土砂も持ち込まれるが、これは興国人絹パルプなどの排水によって長年の汚染にさらされてきたもので、現在も住民達がヘドロと呼ぶ汚染



埋立計画地で採集されたミヤコドリガイ。殻は約1cmで橙色。絶滅危惧種。（写真：岡山大学水保保全学研究室）

の疑いの強いものである。しかもこの埋立地は大入島小学校の正面に位置している。子供たちがダイオキシンなどの被害にあう可能性もある。

大分県は山下らの貝類調査結果を受けて、2003年11月14日から数日間、追加調査を行なったが、その分析結果を待たずに11月18日に着工の指示を出した。これは環境保全措置を含む事業の手續きとしては極めて非常識なものであり、大分県には環境NGO、研究者から多くの抗議が集中した。石間浦の住民は11月18日から、現地に3つのテントを張り、着工に対する監視・実力阻止を始めた。このため大分県は現在も着工していない。

さて、この大入島の埋立問題には、日本の環境運動史上、いくつか注目される点が存在する。第一に、この海域の存在そのものに対する石間住民の強い愛着がこの運動を支えているという点である。石間浦で行なわれている漁業活動は、自家消費の海藻採取、数人の老漁師による刺し網漁・採貝とそれに伴う入札があって、地区全体にとっての経済性は決して高くない。根本的には非常に利害の要素の薄いものであり、また生態系保全やいわゆる自然保護という視点でもなく、場所そのものへの愛によって、この運動が支えられているのが明らかである。すなわち



大入島の埋立予定地の全景（写真：環瀬戸内海会議）

最も単純明快な動機の、環境運動の原点に近い運動が、ごく普通の住民達によって展開されている。第二に漁業権・地先権・入会権の問題と、さらにはそれらを含む地域の自治とは何かという問題が、現在の日本に問われる大きな事件であることである。環境運動とは、すなわち住民運動であるが、住民とは何か、日本における民主主義がこの島で今まさに問われようとしているのである。「磯草の権利」の剥奪は、住民が地域の自然と関わる権利を否定するものに他ならない。

小学校の眼前にあり、イルカが泳ぎ、地域の人が生活の糧を得、限りなく愛している、この海を埋め立てようとしているのは何者なのか？

## Report

### 諫早湾の中・長期開門調査の早期実施を！

JAWANや有明海再生ネットなどが共同で農水省に要望

1月25日の朝日新聞の1面に、九州大学の小松利光教授らの調査結果の記事が掲載されました。諫早湾の閉め切り以降、有明海島原沖の潮流が最大3割も遅くなっていることが、現地調査で分かったのです。諫早干潟の浄化機能の喪失だけでなく、干拓事業による地形の改変が、有明海の海水を停滞させ、赤潮の頻発や水産資源の減少などの原因になっている疑いがますます濃くなりました。

一方で、干拓事業の悪影響を調べるためにノリ不作第三者委員会が提言した、長期にわたって諫早湾の水門を開放して行う調査について、昨年12月に終了した中・長期開門調査検討会議は、調査実施に否定的な内容の報告書を取りまとめました。

これに対し、JAWANや有明再生全国ネットな

どは、調査実施と工事の中止を求める緊急アピールを発表し、1月19日に農水省に要望書を提出しました。このアピールには短期間でありながら、65団体、320人の賛同署名が集まりました。ご協力いただいた皆さまに、お礼申し上げます。

干拓事業による潮流の変化で、自然界の豊かさが失われつつある有明海……その再生のためには社会の潮流を湿地保全へと変えていくことが必要です。これからもご支援をよろしく願いいたします。（矢嶋 悟）

農水省の職員に要望書を手渡す諫早干潟緊急救済東京事務所の菅波完さん（左）



# 和白干潟が国指定鳥獣保護区になりました

松本 悟 (ウエットランドフォーラム)

2003年11月1日から、和白干潟及び前面海域254 ha (干潟面積約80 ha) が、これまでの県設鳥獣保護区から“ 集団渡来地の保護区 ”として「国指定鳥獣保護区」に移設されました。

和白干潟は、すでに97年、第8次指定の候補としてリストアップされていましたが、この時は福岡市の強い抵抗によって実現されませんでした。人工島開発や道路計画に対する規制を福岡市が嫌ったためです。当時、博多湾市民の会などは、福岡市、県、環境省(庁)に出向いて指定に向けての働きかけをしましたが、福岡市は明確な拒否の理由を説明することはなく、環境省も福岡市の態度に困惑した様子でした。

今回の指定は、2002年の予定で進められていました。2002年の10月には最終手続として地元説明会(オープン)まで開催されました。しかし、周辺の畑地の野鳥の食害被害や、地区の開発などの問題で、地元の農業関係、自治会などの了解が得られずに、地区単位での再調整を余儀なくされ1年間遅れてしまいました。周辺の開発は鳥獣保護区の範囲とは全く関係ありませんが、開発に規制がかかるというイメージが先

行してしまっていることや、鳥の保護よりも人間の生活を優先すべきだという意見が出されたようです。これには行政、地元住民やNGOも含めた丁寧な説明会と意見交換、そして十分な理解が求められるところです。現在、問題になっている三番瀬のラムサール登録問題と根っこは同じではないでしょうか。

指定範囲について、海の広場、雁の巣鼻の植物エリアは含まれましたが、新たな4車線道路計画がある奈多～雁の巣の護岸は50 m沖まで規制は及びません。またラムサール登録の前提となっている[特別保護区]の指定は今後の課題として残されました。地元の保護団体などは、博多湾西部の今津干潟も含めるように求めたのですが、今津周辺には、和白干潟以上に九州大学移転や福岡市の水処理場など複数の開発計画があり、今回は指定に及びませんでした。

和白干潟の国指定は、人工島の埋め立てが80%程度進捗して、和白干潟の環境悪化が心配される状況の中でやっと実現しました。あまりにも遅すぎたと言わざるを得ません。人工島着



和白干潟から国指定鳥獣保護区と人工島を望む(写真: 港湾局資料より)

## < 国指定鳥獣保護区の指定目的 / 環境省 >

当該地域は、博多湾の最奥部に位置する和白干潟とその前面海域を中心とする地域で、東アジア・オーストラリア周辺地域渡り経路上に位置していることから、シギ・チドリ類、ガンカモ類等の渡り鳥が多数飛来する。

特に春秋の渡りの時期および越冬時期には、シロチドリ、トウネン、ハマシギ等のシギ・チドリ類が多数渡来し、その渡来数は国内有数の規模である。また、ツクシガモ、クロツラヘラサギ、ズグロカモメ等の希少種の生息も確認されている。

このように、当該地区は、シギ・チドリ類を始めとする渡り鳥の中継地、越冬地として、国際的に重要なことから、集団渡来地の保護区として、鳥獣の保護及び狩猟の適性化に関する法律第28条第1項に基づく鳥獣保護区に指定し、当該地域を利用する渡り鳥の保護を図るものである。

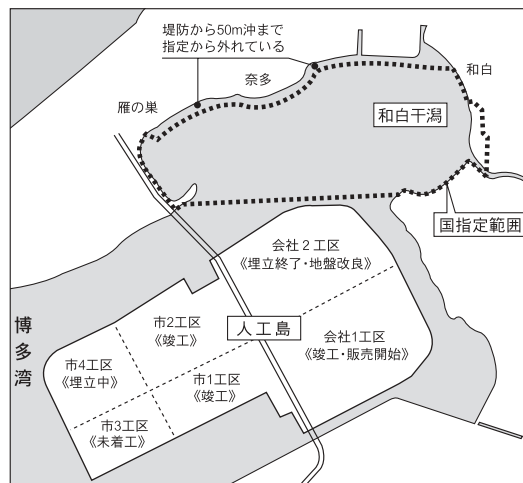


工前に当時の桑原市長が「人工島の埋め立てが終わったら、ラムサール登録もある」と言ったことを思い出します。まさに典型的なラムサール登録の上手？な日本の利用法です。

地元の保護団体の思いは、今回の指定については、「充分ではないが、一歩前進」だと受け止めているのではないのでしょうか。国指定後は、野鳥被害に関する懇談会がスタートして補償額等が決定されることと、20本の鳥獣保護区用札と2基の案内版の設置が決まっているだけです。決して「干潟が良くなるわけでもなければ、鳥が増えるわけでもない」のです。

今回の国指定を機会に、早急に行政、市民、NGOなどが、和白干潟の将来像や改善、保全の目標をつくり、共有することが求められます。これから国指定鳥獣保護区という新たなステージで何をアピールし、獲得できるのかが問われてくるのではないのでしょうか。

今回の国指定にあたっては、和白干潟を守る会、野鳥の会福岡支部、博多湾市民の会など、多くの市民の長年にわたる献身的な努力があったことを記して敬意を表したいと思います。



点線の範囲が指定エリア

## Report 空・川・海・ひとが出会う吉野川ひがた

悔しくも、また悲しいことに、昨年12月初旬より、干潟の真上に架かる東環状大橋（仮称）の工事が始まりました。あの、爽快感に満ちた広々とした河口の風景は、今少しずつ、少しずつ分断されようとしています（表紙写真参照）。

この工事は、私たちが便利で快適な生活を追求するなかで生み出されてきたものですが、私たちは、この工事によって何を失いつつあるのでしょうか？ 吉野川河口の自然と、その風景をもっと多くの人々に知ってもらって、河口干潟の保全につなげたいと、毎年2月2日の世界ウェットランド・デーにあわせて、吉野川河口ひがた展「100



年後の子どもたちへの贈りもの」を開催しました。（2004年2月6日～8日徳島県立近代美術館 / WWF ジャパン助成事業）

また、ひとりでも多くのひとに、世界に誇れる河口干潟の魅力と危機的な状況を知らせるために、PNファンド助成をいただいて吉野川河口干潟の環境マップをつくりました。

吉野川ひがたを見守り続ける人々をふやすことで、干潟保全のあらたなスタートにしたいと思います。（井口利枝子）



とくしま自然観察の会 TEL/FAX 088-623-6783 <http://www.shiomaneki.net/>

# 中津干潟の生物調査報告書を発行しました

「中津干潟レポート2003 中津干潟周辺地域生物目録」

「中津干潟におけるシギ・チドリ類調査 中間報告」

足利由紀子（水辺に遊ぶ会）

私たち、「水辺に遊ぶ会」は1999年設立より、多くの市民の方たちと中津の海や浜の自然環境に触れ、遊ぶ体験を通じ、身近な自然の再発見をすることを目的として活動を行ってきました。活動のひとつとして2000年度より、多くの市民ボランティアと国内の研究者の方々のご協力をいただきながら実施してきました、中津干潟生物調査の中間報告書を、この度、発行いたしました。

豊前海一帯に広がる周防灘西干潟は、その規模や息する生物相などから見て、有明海に次ぐ日本有数の干潟であると思われます。特に中津市沿岸は干潟域が沖合に深く、瀬戸内海の漁業資源を支えていると言っても過言ではないと思われます。しかしながら、現在に至るまで、干潟域のきちんとした学術調査が行われていないため、その真の評価がなされていないまま、環境が悪化しつつあるというのが現状です。

4年間の調査により、カブトガニ、ナメクジウオ、スナメリ、アオギスなど、日本の沿岸域で姿を消してしまった生物たちが比較的健全な状態で息していること、地球規模で移動を行うシギやチドリなどの渡り鳥の中継地として重要

な場所であることなどが分かりつつあります。幼稚園の子どもからお年寄りまで、多くの海を愛する市民ボランティアと、中津干潟に思いを寄せる国内の研究者や人々の手で集められた生物情報は、現時点で確認されているだけでも482種、そのうち絶滅が心配される生物が166種。実に34%が希少種という数字を見ても、中津干潟の自然環境の貴重性がわかります。

アサリ貝が限りなく湧いたという中津の海は死んでしまったと、昔を知る方々は口にされます。それでもなお、中津干潟に残されている自然は、日本国内ではトップクラスに位置されるものです。私たちは多くの方々に、中津の海と浜の素晴らしさを再認識し、身近な自然環境を守ることの大切さに目を向けてもらえるよう、調査活動はもちろん、さまざまな市民活動を続けてまいりたいと思っております。また、漁民の方々とも、中津の海の将来をともに見据えていける関係を築いていきたいと願っております。

私たちが誇ることのできる素晴らしい環境を、未来の子どもたちに残していくために、中津干潟の保全活動に、ご理解とご支援をいただけるよう、よろしくお願いたします。

なお、在庫の限りは、ご希望の方に報告書を配布いたします（郵送料はご負担ください）。下記までご連絡をお願いいたします。

水辺に遊ぶ会 代表 足利由紀子  
事務局：大分県中津市中央町2-8-35  
TEL & FAX 0979-23-5320  
E-mail mizube1999@yahoo.co.jp  
URL <http://www.max.hi-ho.ne.jp/y-ashikaga/>



この写真は中津で最後の護岸のない砂浜、舞手川河口の風景です。塩性湿地の希少な動植物の宝庫で、カブトガニが産卵にくるこの小さな浜は4年に渡る合意形成会議の結果、湿地を保全する方向で、大分県により土地の買い取りが進んでいます。

# 救え！東アジアの湿地と干潟

## 東京ウェットランド・ウィークを開催

青木智弘（諫早干潟緊急救済東京事務所）

JAWAN、諫早干潟緊急救済東京事務所、有明海漁民・市民ネットワーク、NPO現代座は、2003年9月に『東京ウェットランド・ウィーク 救え！東アジアの湿地と干潟 有明海・沖縄・韓国 湿地保全を考えるシンポジウムと演劇公演の4日間』を開催しました。

初日27日は、諫早湾干拓で影響を受けた有明海に関するシンポジウム「有明海の潮流変化と環境破壊」を行ない、深刻な漁業被害との因果関係を検証しながら、干拓事業の妥当性を疑いました。また28日は、「諫早・泡瀬・セマングム 救え！東アジアの湿地と干潟」と題し、国際湿地シンポジウムを開催しました。

国際湿地シンポジウムには、国内から、有明海、瀬戸内海、釧路湿原、東京湾・三番瀬、藤前干潟、敦賀・中池見湿地、吉野川河口干潟、八代・球磨川河口干潟、沖縄・泡瀬干潟などの、環境保全に取り組む市民団体のパネリストが報告を行なっています。

保全や自然再生にむかう湿地や干潟がある一方、沖縄県・西表島ではリゾート開発、石垣島・白保では空港建設といった開発行為で、深刻な危機に瀕している生態系が依然として多いことも明らかになりました。また、環瀬戸内海会議は、環境保全の法律としては問題点の少なくない瀬戸内法改正の必要性を訴えました。

韓国からは環境運動連合生態保全局が参加、セマングム干潟の貴重な生態系や、市民運動「三步一拝」などについて詳細に紹介し、JAWANの柏木実さんはロシア、ドイツなどと共同で行っている、NGO国際共同のハマシギ・ヘラシギ保全プロジェクトを報告しました。屋久島から作家の星川淳さんを招いて、特別講演も行なっています。文化や歴史から、スケール大きく環境や文明の問題を捉えたお話は、感慨深いものがありました。

27日、28日のシンポジウムは盛会でしたが、日本では干潟保全の市民運動が他のあらゆる市民運動と同様 専門分化しすぎていることは、問題です。日本の環境保護運動の多くは、守ろうとしている自然環境について、高度に専門的な知識を有し、学術専門家との協働もすすんでいます。福祉や宗教、芸術、経済や農業、平和や消費生活、人権、労働運動などとの連携は、たいへんに遅れています。

分野ごとの市民運動の孤立は、世界的に見ればきわめて特殊なケースです。環境保護運動の努力のみで解決することではありませんが、好ましい事態ではないでしょう。その点、韓国の「三步一拝」は、複数宗派の宗教運動や、農民たちとの連携が強固で、運動が運動ごとに分断されやすい、連携や共闘下手な日本人にとって、学ぶところが大きかったと思います。

多くの人々の関心を引きおこした「虹の立つ海」演劇公演（NPO現代座、29・30日）は、ウェットランドウィークの締めくくりにふさわしいものでした。タイムスリップのSF趣向が、この劇に、フィクションにしかできない強いメッセージ性を与えていました。干潟保全のみならず幅広く環境問題の重要性を、観客に痛感させる傑作だったと思います。



9月28日のシンポジウムで、韓国のセマングム干拓問題について報告する韓国環境運動連合の朴進燮さん

# マイナピルギナからの便り

## 2003年繁殖調査報告から

柏木 実(日本湿地ネットワーク)

### 第1便(7月12日)

昨年は7週間の調査期間中、ほとんどご連絡ができませんでした。水鳥たちの繁殖地はそんな人間の生活圏から離れたところにあります。今年の調査は村(集落といったほうが日本人の感覚にあてはまりますが)で最初の電話を引いたという、ラマン・ラガロチェフという方の全面的な協力をいただいております、ファックスを送れます。

今年も、調査地に到着したのは成田を出てちょうど1週間目です。モスクワ - アナディルは週2往復、アナディルからは1往復なのですが、アナディルというチュコト自治区の首都で3日待っても、天候が悪くヘリが飛ばず、イワシなどを加工する漁船に乗せてもらいました。5月末にモスクワを出た先発隊は、途中アナディルで2週間もヘリコプターを待たされました。

ここはマイナピルギナというチュコト半島南部の村です。マイナというのはチュコト語で「大きな」という意味、ピルギナは「潟湖」で、近くにペクルニー湖という南北25km、東西30kmくらいの湖があります。下の地図のような場所で、調査はこのマイナピルギナを中心に50 - 100kmの範囲で行います。全鳥類のセンサス(個体数)調査と、シギ・チ



ドリ類とガン類の繁殖調査です。

**ガン類**は、このマイナピルギナの北西30kmくらいにあるヴァーマチカ湖で繁殖するマガンの調査です。このプロジェクトは、日本雁を守る会とロシア科学アカデミーとの共同プロジェクトです。日本にやってくるための、数字の入った色のついた首環をつけます。雛たちの羽化が始まり、成鳥たちは渡りの前に新しい羽を準備するために換羽する時期に入ったこの時期、捕獲を始めます。10日、11日は私もキャタピラー車で連れて行ってもらいました。

河口の少し上流は長野県の安曇野の風景で、植生は7月のアルプスのお花畑にそっくりです。抱卵をこのあたりで行った後、河口部で換羽を行います。韓国のナクトン江河口の数倍、小櫃川河口の数十倍の広さがあり、植生が豊かで、中州の発達した地形です。ガンたちは、飛べなくなるこの時期、中洲に移って、外的に襲われないようにして換羽を終わらせます(しかし抱卵中にシロギツネや、ヒグマなどに襲われたものが、なんと50%近くとか)。

**シギ・チドリ類**の調査の方が日本湿地ネットワークのロシア科学アカデミーと行っているプロジェクトで、これはマイナピルギナの集落のすぐ外から、20 - 30kmくらいの範囲で、ヘラシギを中心としてさまざまな種の繁殖の様子、営巣環境を調べています。ハマシギは、私の到着が遅れたので、すでに孵化が終わっていきそうです。捕獲が困難になりますが、できるだけ多くの標識鳥を増やそうと思っています。

ただ、アラスカではすでに200羽のハマシギの標識鳥が放鳥され、すでに日本、台湾で観察されているのに、チュコトでも150羽くらい標識したのですが、フラッグ観察がありません。このことは、チュコトから日本に来る割合が、アラスカよりずっと少ないということかもしれません。

ヘラシギについて、今年はこれまで考えられていたよりもずっと奥地での営巣が見つかりました。中継地や越冬地できちんと調べる必要がさらに出てき



ました。ここはハマシギやヘラシギ以外にも、ムナグロ、メダイチドリ、ハジロコチドリ、オバシギ、ヒバリシギなど16種ものシギ・チドリ類が、それぞれかなり違う環境で繁殖している重要な繁殖地です。

これまでの調査の結果、全世界の個体数3 - 500羽と推計されるヘラシギは、韓国の全羅北道の干拓現場セマンガムが最大の渡りの中継地です。この、諫早干拓の11倍の干拓面積を持つ事業の開発者たちはシギ・チドリ類がどこにでも生息地を見つけて移動できるから、あの大きな中継地を埋め立ててよいと主張しています。このことは、この繁殖地全体を埋め立てても他で繁殖できると主張しているようなもの、とチームの人たちも怒っています。

というわけで、私はここで、両調査地合わせて11名（ロシア7、ドイツ3、日本1）のメンバーと7月4日から調査を始め、毎日10kmくらいフィールドを歩き回っています。おかげでかなりのダイエットです。ではまた。

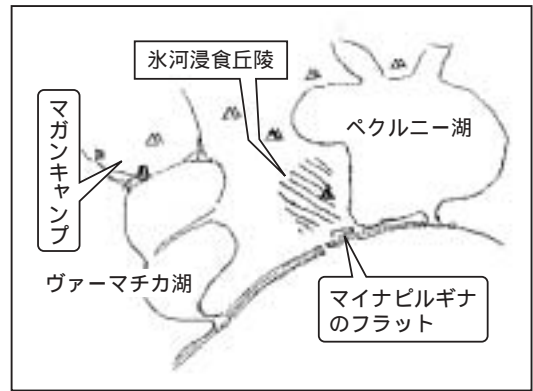
## 第2便（7月20日）

11日に先発隊のうちリーダーのジュニアを含む3人が帰りました。

ガンは子育てが一段落して換羽を始めます。羽がなくなって飛べなくなるこのときを見計らって、ガンの捕獲を始めます。研究者で、サブリーダーのヴァロージャがヴァーマチカへ移動（33kmを徒歩!!）したので、シギ・チドリ部隊は2人になりました。

ヘラシギはマイナピルギナ集落のすぐ近く（一番近いのは200m弱）でも営巣しており、そこから、この一帯の一边20km位を調査しています。10km以上のところは、地域の人でオートバイ（サイドカーつき）を持っている人に頼んで運んでもらいます。

私の方は、ハマシギを探して歩きまわっています。ハマシギは、ここでは湖の西側にある氷河の侵食丘陵の間のツンドラに営巣しています。丘陵地は、起伏に富んで、残雪が水になって残り、圈谷がいっぱいあって、適当な高さの草が生えた湿地で、ハマシギが営巣地としてよさそうなのですが、なぜか北の方（ベースとなっているフラットから遠い方に）にしかいません。それで私は、ハマシギを求めて村から、直線距離で、4~8kmあたりの圈谷を歩いてい



ました。

ツンドラの湿地を歩いていくと、営巣中や、ヒナを連れてくる親鳥が私を見つけて警告の声を上げます。シギ・チドリ類であれば、その声と、その後の行動を観察して、巣があればそこにワナをしかけて、卵を暖めに戻った親を捕まえます。親鳥の本能を利用するのに、抵抗感もあります。東京湾でも、チュコトでも25年間に75%も減少しており、適切な対策がとても大切です。

**シギ・チドリ類の調査をするメンバー**を紹介します。

11日に帰ったのが、この調査のリーダーのジェニア・シロエチコフスキー（ロシア科学アカデミーの生態・環境研究所とガン研究会（RGG）の責任者で、北極圏踏査を90年代から企画）。彼の連れ合いのレナ・ラッポ（科学アカデミーのシギ・チドリ類研究会の研究者）。それと、ロンドンにあるボン条約関係の研究所で働いているドイツ人のクリストフ・ツェックラー。彼もシギ・チドリ類担当。

私と一緒に残ったのが、昨年モベリヤカ洲で一緒に1ヶ月調査したヴァーニャ・タルジェンコフ。彼は5月に昨年の調査でディプロマ（日本の修士論文）を出しました。主にヘラシギの生態調査をしています。それと先ほどのヴァロージャ・マローゾフ。彼は70年代終わりに、この調査の共同研究者でもあるパヴェル・トムコヴィッチの指導でトウネンの研究を行って以来、シギ・チドリ類から、ガン・カモ他さまざまな鳥類の研究をしてきた人です。

## 第3便（8月1日）

踏査も次第に終わりに近づきました。予定では、10日に、チュコト政府で使っているヘリコプターが

私たちと、踏査機器など一切をアナディルまで運んでくれるはずになっているのですが……。[ 結局ヘリは飛ばず、16日にキャタピラーで出発。アナディルについたのは20日早朝だった ]

**\* マガン担当のメンバーについて :** ずっとヴァーマチカに貼りついているのが3人の大学生、モスクワ大学4年生(来年に論文)のフェージャと、ドイツのイエーナ大学4年生のマティアスとアンナです。中心はヴァロージャ。ディーマ・ダブルニンは、モスクワ大学のリモートセンシング研究室の中心人物で、石油など鉱物資源に関する仕事もしていますが、ガンの生息地と衛星画像の関係を調べてきていて、ヘラシギの生息地を衛星画像から把握し、保護のための情報にしていこうという今回の調査のひとつの分野を担当しています。もう一人のアレクサンドル・アルトゥチョフは、ガンの調査にずっと参加してきた獣医学校の先生です。年長者で、私くらいの年齢だと思えますが、聞き出せていません。ユーモラスな人です。[ 実は私が最年長だった ]

**\* マガンの調査について :** マガンチームのキャンプしているヴァーマチカ湖はマガンの繁殖地です。少し奥地にヒシクイの繁殖地もあり、数十の個体が生息していますが、マガンはおそらく1000羽ぐらいがここで繁殖しているとのこと。マガンたちは、ヴァーマチカ川の河口にあたる湖よりも2kmくらい上流のデルタ地帯に分散して営巣しています。雛が孵ったあと、同じところで給餌や保護の必要がなくなるまで過ごします。親鳥たちはその後渡りに備えて、換羽します。この間は、ほとんど飛ぶことができなくなるので、周りを水で囲まれ、隠れ易い、河口近くの丈の高い草の生えている島に移動し、じっと潜みます。

踏査チームは前半、デルタの中の、少し高い丘陵をベースキャンプとして、営巣状況を調査していましたが、換羽にあわせてキャンプを河口近くに移し、飛べなくなった彼らを捕獲し、標識リングをつけ、首に数字のついたカラーリングをつけて放鳥しています。

マガンは2 - 3kgもあり、力も強いので、まず捕獲網のための杭を立てて放置し、警戒心を解いてから網を張り、網に追い込んで捕獲します。島の上を走りまわるガンを追いかけたり、水に逃げた個体を捕まえたり、という作業になります。かなりの知識、知恵と、体力、泳力が要求されます。27日に戻って

きたディーマの腕や体には、爪による掻き傷や、嘴による突き傷がいっぱいでした。(私自身はハマシギを主に、小型のシギ・チドリ類を探し回っているので、ガンの調査には加わっていません。全て伝聞です……)

フィールドの色が変わってきました。足元の植物が紅葉し始めました。ここは北極圏から少し南に外れた所がありますが、確実に秋に向かっていきます。ずいぶん静かです。鳥たちは子育てを終えて、渡りの準備に移動し始めたようです。それでは。

2003年の南への渡り、チュコトからのハマシギはまだ見つかりません。しかしヘラシギは一昨年(2002年)の東京湾に続いて、昨年の夏フラッグをつけた幼鳥の一羽が、今度は9月22日に韓国のセマングムで観察されました(下の写真。右足関節の上にフラッグがある)。また、ヴァーマチカで標識をつけた55羽のマガンのうち、11月はじめの段階で45羽が宮城県にやってきたことが確認されました。

このチュコトでのシギ・チドリ類調査は2000年の繁殖期から、これまでWWFJ、トヨタ財団、経団連自然保護基金の助成を受けて続けてきました。援助が続けて受けられれば、2004年も5月末から、8月までマイナビルギナで調査を行います。韓国市民たちが11月からセマングムで始めている毎月の調査とも連動し、中継地での観察を増やしたいと思っています。

シギ・チドリ調査の様子は次号でお伝えします。

(2004年1月)



2003年9月21日、韓国全羅北道セマングムの干潟にやってきたヘラシギの幼鳥

# 中池見湿地から朗報! 大阪ガスが中池見湿地を敦賀市に寄付

1月22日、大阪ガスが開発計画で買収した土地(80ha)と現存の施設の全部を敦賀市に寄付すると表明しました。中池見が帰ってきました!

2月1日に中池見湿地の保護・保全を目的として設立したNPO法人「ウエットランド中池見」の設立記念講演会で、来賓として挨拶をいただいた敦賀市長から「将来的にはラムサル登録を目指したい」との表明があり、これから本格的にラムサル条約に関する学習が必要と思っています。また、市の関係者や議員、市民などとともに学習会を開催していきたいと考えています。

その節には、JAWANの皆さんにお力添えをお願いすることとなろうかと思えます。今後ともどうぞよろしくお願ひします。(笹木 進・智恵子)

2004年1月23日の  
福井新聞より

## JAWAN 会計より

2004年度(1月~12月)会費納入のお願い  
今年もぜひ、日本湿地ネットワーク(JAWAN)を応援してください

皆様からの会費が活動の重要な源泉となっております。今年度会費を3月31日までに下記の郵便振替口座まで納入してくださいませよう、よろしくお願ひ申し上げます。なお、既に納入された場合はなにとぞご了承ください。

2004年1月現在の会員数は68団体、個人会員158名です。多くの方のご入会をお待ち申し上げます。

個人会費 3,000円、団体会費 5,000円

郵便振替口座 00170-8-190060

日本湿地ネットワーク

(会計:伊藤昌尚・TEL/FAX 048-845-7177)

カンパありがとうございます!今後とも皆さまの暖かいご支援をお願いいたします。

2003年4月~2004年1月までに、以下の皆さまからカンパをいただきました。(敬称略・順不同)

\* \* \*

安部 斎、木原滋哉、鈴木晃子、岩崎真有美、三谷親子、大阪自然教室、小池道子、大坪省三、(NPO法人)トラストサルン釧路、馬場浩子、藤岡正博、片寄俊秀、佐野すま子、細野純人、山内美登利、牛野くみ子、青木敬介、堀 良一、大岡香織、松本周司、ジャレル・ダグラス、このほかに匿名の方々。

イベント名/日時/場所/主催団体/問い合わせ電話番号の順に記載。

JAWAN通信編集締切日までに参加登録があったイベントのみを掲載しています。

野外イベントの場合、集合が別の場所・時間となるものもありますので、事前に各イベントの主催者に確認の上、ご参加ください。

宮城県

鳥の海探鳥会 4/25 (日) 9:30 / 亶理町・鳥の島 / 日本野鳥の会宮城県支部 / 0224-55-5427 (小室)

蒲生海岸自然観察会 5/5 (祝) 9:30 / 仙台市・蒲生海岸 / 蒲生を守る会 / 022-223-5025 (木村)

千葉県

盤洲干潟学校 (観察会) 3/21 (日) 10:00 / 木更津市・小櫃川河口・盤洲干潟 / 小櫃川河口・盤洲干潟を守る連絡会 / 0439-27-2245 (御藤納)

印旛沼北部探鳥会 3/28 (日) 9:30 / 印旛沼北部調整池 / 日本野鳥の会千葉県支部 / 047-426-0310 (土曜 15:00 ~ 18:00)

小櫃川探鳥会 4/4 (日) 9:30 / 木更津市・盤洲干潟 / 日本野鳥の会千葉県支部 / 047-426-0310 (土曜 15:00 ~ 18:00)

三番瀬自然観察会 4/4 (日) 5/2 (日) 10:00 / 船橋市・三番瀬 / 千葉県野鳥の会 / 043-279-5748 (沢田)

三番瀬探鳥会 4/4 (日) 5/2 (日) 10:00 / 船橋市・三番瀬 / 日本野鳥の会東京支部 / 03-5273-5141 (前田)

新浜探鳥会 4/11 (日) 5/9 (日) 10:00 / 浦安市・新浜 / 日本野鳥の会東京支部 / 03-5273-5141 (前田)

センス・オブ・ワンダー2004 われらをめぐる海三番瀬 4/17 (土) 15:00 浦安市民プラザWAVE 101 4/18 (日) 9:00 三番瀬日の出干潟 / レイチェル・カーソン日本協会 / 03-3811-5511 (田和)

三番瀬探鳥会 4/18 (日) 10:00 / 船橋市・船橋海浜公園 / 日本野鳥の会千葉県支部 / 047-426-0310 (土曜 15:00 ~ 18:00)

谷津干潟自然観察会 4/18 (日) 5/5 (祝) 10:00 / 習志野市・谷津干潟 / 千葉県野鳥の会 / 043-279-5748 (沢田)

三番瀬護岸ハイキング 4/18 (日) 10:00 / 市川塩浜 - 浦安 / 三番瀬を守る署名ネットワーク / 047-184-8336 (竹内)

谷津干潟探鳥会 4/18 (日) 5/16 (日) 10:00 / 習志野市・谷津干潟 / 日本野鳥の会東京支部 / 03-5273-5141 (前田)

谷津干潟探鳥会 4/25 (日) 10:00 / 習志野市・谷津干潟 / 日本野鳥の会千葉県支部 / 047-426-0310 (土曜 15:00 ~ 18:00)

小櫃川河口自然観察会 5/3 (祝) 9:30 / 木更津市・小櫃川河口 / 千葉県野鳥の会 / 043-279-5748 (沢田)

盤洲干潟小櫃川河口域クリーン作戦と観察会 5/23 (日) 9:30 / 木更津市・盤洲干潟小櫃川河口域 / 盤洲干潟をまもる会 / 0439-27-3002 (藤平)

東京都

多摩川探鳥会 4/4 (日) 5/9 (日) 10:00 / 多摩市・多摩川開谷橋 - 大栗川合流点付近 / 日本野鳥の会東京支部 / 03-5273-5141 (前田)

東京港野鳥公園探鳥会 4/4 (日) 5/9 (日) 10:00 / 大田区・東京港野鳥公園 / 日本野鳥の会東京支部 / 03-5273-5141 (前田)

葛西臨海公園探鳥会 4/25 (日) 5/23 (日) 10:00 / 江戸川区・葛西臨海公園 / 日本野鳥の会東京支部 / 03-5273-5141 (前田)

神奈川県

平潟湾の干潟ウォッチング 4/17 (土) 9:00 / 横浜市金沢区・野鳥公園と平潟湾 / 金沢野鳥クラブ / 045-784-8246 (竹内)

長野県

干潟の鳥BEER「ギロチンの考案者はギロチンで殺された」「ヘュー」(講演会と観察会) 4/24 (土) 10:00 / 南安曇郡堀金村・県営鳥川溪谷緑地 / 野生生物資料情報室 / 090-7269-5752 (長坂)

福井県

春の野道と食いしん坊 & 野外ライブ 4/25 (日) 10:00 / 敦賀市榎曲・中池見湿地 / 中池見湿地トラスト / 0770-22-2903 (田代)

愛知県

豊川河口干潟で遊ぶ会 4/17 (土) 10:00 / 豊橋市・六条潟 (シーパレス地先) / 六条潟と三河湾を守る会・他 / 0532-88-4358 (市野)

干潟探検隊 4/18 (日) 10:00 / 名古屋市・藤前干潟 / 藤前干潟を守る会 / 052-735-0106 (辻)

生きものまつり 5/5 (祝) 10:00 / 名古屋市・藤前干潟 / 藤前干潟を守る会 / 052-735-0106 (辻)

三重県

干潟でバームクーヘンをつくろう 4/18 (日) 10:00 / 川越町・高松海岸 / 高松干潟を守る会 / 0593-51-0878 (柳川)

榊田川河口探鳥会 4/24 (土) 10:00 / 松阪市大口町・榊田川河口 / 日本野鳥の会三重県支部 / 0598-21-6033 (中村)

干潟の生物観察会 5/23 (日) 12:30 / 松阪市・榊田川河口・松名瀬干潟 / 志摩半島野生動物研究会 / 090-8957-9288 (若林)

大阪府

矢倉海岸探鳥会 4/17 (土) 9:30 / 大阪市淀川区・矢倉海岸 / 日本野鳥の会大阪支部 / 06-6352-0302 (橋本)

淀川探鳥会 4/18 (日) 9:00 / 大阪市北区・淀川 / 日本野鳥の会大阪支部 / 06-6352-0302 (橋本)

男里川探鳥会 4/24 (土) 9:30 / 阪南市・男里川 / 日本野鳥の会大阪支部 / 0724-53-3521 (長谷川)

矢倉海岸シギ・チドリ探鳥会 5/3 (祝) 9:00 / 大阪市淀川区・矢倉海岸 / 日本野鳥の会大阪支部 / 06-6352-0302 (橋本)

野鳥園オリエンテーリング どんな生きものがどこにいるのたろう 5/3 (祝) 10:30 / 大阪南港野鳥園 / 南港グループ 96 / 06-6613-5556 (南港野鳥園事務所・水曜定休)

大津川河口探鳥会 5/4 (祝) 10:00 / 泉大津市・大津川 / 日本野鳥の会大阪支部 / 0725-92-1186 (納家)

干潟でさがそう! 不思議な生き物たち 5/5 (祝) 12:30 / 大阪市福島区・淀川左岸海老干潟 / 大阪自然環境保全協会「淀川自然観察会」 / 0724-44-4312 (中野)

兵庫県

浜甲子園探鳥会 5/5 (祝) 10:30 / 西宮市・浜甲子園 / 日本野鳥の会大阪支部 / 0724-76-3434 (坪内)

広島県

松永湾探鳥会 4/25 (日) 9:00 / 福山市・松永湾 / 日本野鳥の会広島県支部 / 084-934-0803 (石井)

八幡川探鳥会 4/29 (祝) 9:00 / 広島市・八幡川河口 / 日本野鳥の会広島県支部 / 0829-56-1354 (日比野)

徳島県

春が来た! 鳥・虫・魚はどうしているかな? 4/18 (日) 9:00 / 徳島市・吉野川河口干潟 - 沖洲海岸 / 日本野鳥の会徳島県支部 / 088-633-0180 (支部事務所)

吉野川の風に吹かれてオープンカフェ & エコアート 5/2 (日) 10:00 / 徳島市・吉野川河口干潟 / とくしま自然観察の会・他 / 088-623-6783 (井口)

香川県

春日浜生き物観察カヌーツアー 5/29 (土) 10:00 / 高松市・春日浜 - 屋島自然海岸 / カヌーショップハルリバ / 090-8287-5388 (佐野)

愛媛県

重信川河口探鳥会 4/29 (祝) 9:30 / 松山市 - 松前町・重信川河口 / 日本野鳥の会愛媛県支部 / 089-923-2779 (秋山)

加茂川河口探鳥会 4/29 (祝) 13:00 / 西条市加茂川河口 / 日本野鳥の会愛媛県支部 / 0897-53-7862 (山本)

福岡県

今津探鳥会 4/4 (日) 5/2 (日) 9:00 / 福岡市西区田尻・今出一帯 / 日本野鳥の会福岡支部 / 092-573-1827 (森)

和白海岸探鳥会 4/11 (日) 5/9 (日) 9:00 / 福岡市東区和白海岸一帯 / 日本野鳥の会福岡支部 / 092-573-1827 (森)

シンボジウム いいかげんにしろ! 博多湾人工島。底なしの税金投入 4/11 (日) 14:00 / 福岡市コミセン和白 / 博多湾会議 / 090-3011-9375 (脇)

和白干潟のクリーン作戦と自然観察 4/24 (土) 15:00 / 博多湾・和白干潟 / 和白干潟を守る会 / 092-606-5588 (田中)

大分県

ようこそ南半球からの旅人たち 4/18 (日) 10:00 / 中津市・東浜シーサイドギャラリー前埠頭 / 中津干潟を守る会 / 097-543-8135 (木船)

大新田ビーチクリーン 4/18 (日) 11:00 / 中津市・大新田海岸 / 水辺に遊ぶ会 / 0979-22-5823 (安倍)

大新田干潟観察会 5/2 (日) 13:00 / 中津市・大新田海岸 / 水辺に遊ぶ会 / 0979-23-5320 (足利)

長崎県

討論・諫早湾干潟の再生を考える 4/10 (土) 12:30 / 諫早市長田町・みのり会館 / 諫早干潟緊急救済本部 / 0957-23-3740 (山下)

熊本県

不知火海球磨川河口シギ・チドリ探鳥会 4/11 (日) 14:00 / 八代市鼠蔵町・球磨川河口右岸堤防 / 八代野鳥愛好会 / 0965-33-5447 (高野)

沖縄県

豊かな干潟を味わおう 4/4 (日) 10:30 / 佐敷干潟 (富崎朝側) / 佐敷干潟と遊び学ばしあわせまねきの会 / 098-947-6581 (古謝)

干潟を守る日写真展 - 佐敷干潟の豊かさ - 4/10 (土) ~ 4/18 (日) / マックスバリュ-佐敷店 / 佐敷干潟と遊び学ばしあわせまねきの会 / 098-947-6581 (古謝)

大嶺海岸浜下り 4/18 (日) 10:30 / 大嶺海岸 (瀬長島) / 漫湖自然環境保全連絡協議会 / 098-951-3229 (玉城)

SEA 泡瀬干潟を守る行動 (仮称) 4/18 (日) 12:00 / 泡瀬干潟コメツギカゴの浜 - 仮設橋梁前 / 泡瀬干潟を守る連絡会 / 090-5476-6628 (前川)



編集後記

原稿を執筆して下さったみなさまに感謝いたします。77号発行の目途がたち、庭に出ると、陽射しは強くなり、水仙の芽が目立つ季節になっていました。春はうれしいけど花粉症との長いつきあいの始まりだ。編集って未知の世界。みなさま次号をまたよろしく。(昌)

貝の名前はなんてこんなに優雅なのでしょう。大入島のミヤコドリガイ、三番瀬のウネナシトマヤガイ。どちらも貝類保全研究会の山下さんのおかげで覚えられました。きれいな海で会いたい。(恵)

先日、NHKの子供向け教育番組のホームページから、JAWANのホームページをリンクしていただきました。干潟を守る日のコーナーも新設し、コンテンツも少しずつ増えています。本誌とともにぜひご覧ください。(矢)